

特集

同じ一年でありながら、長く、また短かくもある一年。1981年はどんな一年だっただろうか？

1981年、総集編

国際化社会といわれた1981年、総理として初の外遊に出た鈴木首相は、東南アジア諸国連合（アセアン）5ヶ国を歴訪、アジアの仲間アセアンと共に歩む日本を強調した。平和と人権擁護を説いてアジアを歴訪中のローマ法皇ヨハネ・パウロ二世が来日、我が国にキリスト教が伝来して431年、ローマ法王の来日は初めてのことであった。

戦後36年目にして初めて肉親を探すため中国から日本人残留孤児47人が来日、一行の一人、顔淑琴さんは、「人は皆、誰でも親がいるのに私たちにはいない、親のいない悲しみ、苦しみ、それは言葉でいいあらわせません」劇的な親子対面の影で、本当の親子でありながら、名乗り出ることのできない人もいた、中国東北地区（旧満州）には、今もこうした孤児が7000人もいるといわれている。

資源有限時代を迎え、新しいエネルギー源とし期待される原子力発電所。しかし、我が国のモデルケースともいえる日本原子力発電会社の敦賀原発から多量の放射能がもれ、原発に対する不安は一挙に高まった。高知県・窪川町では、原子力発電所の立地調査をめぐる、町を二分する激しい町長選挙が行なわれた。原発の撰択をかけた首長のリコール成立は全国で初めてだった。また、政府のエネルギー政策で、国内炭の見直しが行なわれているさ中、北海道夕張市の北炭夕張新鉱で、死者43人行方不明50人を出す事故が発生、戦後の炭鉱事故としては、史上三番目の大惨事となった。

日本の経済力が強まるにつれ、日本とアメリカの貿易摩擦問題が発生、特に自動車は深刻な事態を迎えた。鈴木首相はレーガン大統領と会談後、「日米同盟」を強化していくと発表、だが、同盟問題は伊東外相の辞任へと突進した。こうした折、ライシャー元駐日大使が「核持ち込み」発言。日本中に大きな衝激を与えた。アメリカ艦船の核積載疑惑が一段と深まる中、米空母ミッドウェーが横須賀基地へ入港。

経済摩擦はアメリカばかりでなく、ヨーロッパでも起きた。鈴木首相は日本とヨーロッパの新しい対話を求めて欧州共同体・EC六ヶ国を訪問。また不振を続ける西側経済の回復を図り、政治的連体の強化をめざす第7回先進国首脳会議が、カナダのオタワで開かれた。更に世界の首脳22人が参加して南北サミットがメキシコで開催された。

今や1ヶ国だけで生きていくことは不可能となり、宇宙船地球号をどうするかが大きなテーマとなった。

しかし、国際協調のかけ声とはうらはらに、一方では防衛力の整備が唱えられる。日本はアメリカの要請で、大きく右へ旋回しつつある。防衛予算は増え続け、福祉予算は削られる1981年は国際障害者年、が、障害者の生活基盤は弱く、社会生活に溶け込んでいる人はごくわずかしかない。

世界の中の大国といわれる日本は本当に強いのか、日本で初めて開かれた国際レース、ジャパンカップ。日本優勢の予想むなしく惨敗。1982年に向けてスタートした鈴木改造内閣、厳しい国際競争の時代を迎えて、日本は今後どのような進路をとっていくのか。